

平成22年5月24日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006 ～ 2009  
 課題番号：18520204  
 研究課題名（和文） 現代アメリカ演劇における歴史表象と文化的アイデンティティの関係性  
 研究課題名（英文） The Relationship between Historical Representation and Cultural Identity in Modern American Drama  
 研究代表者  
 貴志 雅之（KISHI MASAYUKI）  
 大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
 研究者番号：30195226

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、人種、ジェンダー、クイアの領域・集団で個々に扱われてきた歴史認識・歴史表象と文化的アイデンティティの関係性を、アメリカ演劇の歴史表象を巡る「政治学」として「人種、ジェンダー、クイア横断的」に捉え、歴史表象と文化的アイデンティティの関係性をめぐるアメリカ演劇の演劇的想像力と政治学の系譜および方向性を学際的に捉えなおし、今後のアメリカ演劇の政治学と方向性を通時的・共時的視座から体系化したアメリカ演劇の政治文化研究である。

## 研究成果の概要（英文）：

My research has considered the relationship between historical representation and cultural identity in general, which preceding studies have addressed under the separate categories of race, gender, and sexuality. My studies have elucidated the relationship as the “Politics” of historical representation by American drama crossing those categories. Thus, my research has diachronically and synchronically reconsidered and identified the genealogy and direction of the Politics of twentieth-century American drama centering on historical representation and cultural identity. A series of articles and co-authored books has been published.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	1,800,000	390,000	2,190,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：アメリカ演劇、歴史表象、文化的アイデンティティ、政治学、帝国主義、他者、人種、ジェンダー

## 1. 研究開始当初の背景

(1) アメリカ演劇研究の領域で、1990年台以降、アフリカ系、アジア系などの人種を核とした演

劇、有色人女性のジェンダー・フェミニズム演劇、そしてクイア演劇において、歴史の見直しと歴史認識・歴史表象の問題が、周縁化されて

きた人種、ジェンダー、クイアそれぞれの利益団体のアイデンティティ・ポリティクスと連動した研究が次々に発表された。歴史性／歴史認識の問題と、ポスト多元文化社会での文化的・人種の交雑性を含む文化的アイデンティティ、という2つの問題が21世紀のアメリカおよび英語圏演劇の共通意識・課題となることが示唆されてきた。しかし、日本国内ではこうした問題意識からの系統的アメリカ演劇研究は現れていなかった。

(2) 一方、自身の研究としては、本研究の萌芽となった、アイリッシュの飲酒と歴史性を論じたユージーン・オニール研究(共著『酔いどれアメリカ文学—アルコール文学文化論—』[英宝社、1999]所収)を始めとして、アフリカ系アメリカ人の人種、ジェンダー、歴史の相関性を取り上げたオーガスト・ウィルソン研究(共著『ジェンダーとアメリカ文学』[勁草書房、2002]所収)、さらに日系スモールタウンの日本人妻を中心に日系アメリカ人の歴史的記憶の再現と継承の問題を扱った日系女性アメリカ演劇研究(『スモールタウン・アメリカ』[共著、英宝社、2003]所収)、そして『エンジェルズ・イン・アメリカ』の女性たち(『アメリカ演劇』第16号[トニー・クシュナー特集号]、全国アメリカ演劇研究者会議、2004)では、クイアとユダヤを中心に、21世紀に向かうアメリカの歴史認識・表象の問題を検討してきた。本研究はこうした研究過程の当然の帰結であり、次の段階の研究課題へと向かうスタートラインに他ならない。

## 2. 研究の目的

本研究は、ポストコロニアリズム、ポスト多元文化主義、ポストモダニズム、フェミニズムを中心に、人種、国家、ジェンダーなどの諸問題と連動して活発化する歴史表象／歴史認識を巡る問題・言説に着目し、現代アメリカ演劇が支配的イデオロギーと共犯／対抗関係を結びながら、いかに歴史を表象してきたか考察、歴史表象と文化的アイデンティティとの関係性を通時的かつ共時的に分析・検証することにより、歴史表象／認識システムの脱構築へと向かう現代アメリカ演劇の政治学と演劇戦略を社会文化的コンテクストの視座から明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

研究の方法・手続きとして、人種、ジェンダー／セクシュアリティ、クイア、帝国主義、資本主義、以上5つの観点から、20世紀転換期から第2次世界大戦終了まで、冷戦時代、ポスト冷戦時代の3つの時代区分を中心に、劇作家の作品テキスト、劇作・上演に関連する多様なメディア資料、歴史・社会・政治・文化的資料、そして劇作家・作品に関する先行研究に関して、批評理論を援用しつつ演劇的歴史表象と文化的アイデンティティとの関係性を共時的に分析し、

同時に上記5つの観点で示される時代を貫くテーマに添った通時的考察を行った。この方法により、20世紀以降の現代アメリカ演劇テキストの歴史表象と文化的アイデンティティのあり方を政治・文化・社会的視座から探った。

## 4. 研究成果

(1) 20世紀以降の現代アメリカ演劇の大きな特徴のひとつは、ヨーロッパによるアメリカ大陸の発見・征服に始まるアメリカ史・歴史認識の再考・脱構築を目指す志向性にある。アーサー・ミラーの『黄金の時代』(1987)、ユージーン・オニールの『皇帝ジョージズ』(1920)、アメリ・バラカの『奴隷船』(1967)と『奴隷』(1964)、スーザン＝ロリ・パークスの『アメリカ・プレイ』(1993)と『トップドッグ／アンダードッグ』(2001)、そしてヴェリーナ・ハス・ヒューストンの『ティー』(1987)という現代アメリカ演劇テキストの流れが示すのは、ヨーロッパによるアメリカ大陸の征服に始まる地球を西回りに覇権を拡大した白い帝国主義が、他者を征服・支配し、スパイラル状の軌跡を残してきた光景である。上記作品を中心に、コルテスによるアステカ征服物語から、ポストモダン・アフリカ系およびアジア系の人種問題に至るアメリカ演劇の歴史表象と文化的アイデンティティ構築・更新との関係性を問題とした研究成果を、「帝国支配の記号としての銃と他者」をテーマに、銃の記号性を「他者」の人種的歴史(再)表象メディアとしての身体論と連動させた研究“Semiotics of Empire Domination: Guns and the Other on the American Stage”を2006年8月米国ATHS(Association for Theatre in Higher Education)20周年記念大会(於:シカゴ)のATDS(The American Theatre and Drama Society)発題パネル“Empire vs. Nation in American Theatre History”で発表。さらに同研究を論考「帝国支配の記号学—舞台の上の銃と他者」にまとめ、共著『神話のスパイラル—アメリカ文学と銃』(英宝社、2007年3月)として刊行した。

(2) 合衆国における植民地主義、帝国主義、ポスト植民地主義の歴史表象の変遷を中心に、両世界大戦、冷戦、ポスト冷戦に至る政治と演劇の関係性を通時的に見た「アメリカ演劇の政治学」研究の一つの成果として、現代アメリカ演劇の歴史表象の変遷と射程を鳥瞰図的に論じた論考「現代演劇の冒険—テーマ・パークのリンカーン」を、共著『二〇世紀アメリカ文学を学ぶ人のために』(世界思想社、2006年10月)で発表した。最終的に、白いアメリカ正史を構成する歴史的人物・事件と正典的文学テキストをパロディ化／黙示録化し、声なき黒人物語によって書き換え、再表象化していくアフリカ系アメリカ人女性劇作家スーザン＝ロリ・パークスの正史脱構築演劇戦略を今後のアメリカ演劇の一つ方向性として位置付けた。

(3) 同性愛者のヴェトナム戦争での両足喪失とトラウマを焦点化し、ヴェトナムからポスト・ヴェトナム時代を背景に資本主義・戦争・クイア・アイデンティティ問題を論じた論考「クイアのポスト・ヴェトナム——ランフォード・ウィルソンの『七月五日』をめぐって」(『アメリカ演劇』第20号、2009年1月)を公表。クイアをクイア・エンパワメントのエージェントとしてではなく、女性、ユダヤ人、私生児、身体的障害者を含む多様なマイノリティと協調して新たな価値体系を築くパイオニアとして論じ、周縁化された人々の協調的コミュニティのあり方が、クイアのポスト・ヴェトナム・ポリティクスのあり方を示唆するものとして位置付けた。

(4) 赤狩りと同性愛者弾圧のパラレルを中心に、テネシー・ウィリアムズのクイア演劇戦略を分析した研究、「クイア・カップルの亡霊と遺産——テネシー・ウィリアムズのCat on a Hot Tin Roof」(『立命館国際研究』第21巻3号)を公表。50年代のブロードウェイ・コマーシャルイズムとアメリカ国家権力の冷戦政治学に対するクローゼットのクイア劇作家ウィリアムズの立場とアイデンティティを表象する政治戦略的演劇テキストとして『やけたトタン屋根の上の猫』を読み直す。そして、ブランテーションの創設者クイア・カップルの亡霊をホモフォービク社会にウィリアムズのクイア言説を流通させるエージェントとして論じた。

(5) ソートン・ワイルダーの『わが町』を中心テキストとして、両世界大戦間のアメリカ演劇イデオロギーをアメリカ歴史表象の観点から検証した論考「グローヴァーズ・コーナズの地政学——『わが町』に見るサブリミナル・ポリティクス」(『アメリカ演劇』第21号、pp. 3-32)を公表。その中で、アメリカの理想的アメリカン・コミュニティを映し出すとされた『わが町』が、実はアメリカ正史の正当性と愛国心、アメリカ人としての誇りと郷愁を喚起し、アメリカのナショナル・アイデンティティを強化するアメリカニズム演劇メディアであったと論じた。また、『わが町』を潜在的にアメリカニズム、アメリカン・アイデンティティおよび支配的歴史表象を共有・強化するサブリミナルな影響力を持つ演劇メディアであると結論づけ、演劇・文学・映像を含む多様なメディアによる大衆誘導の共犯者／エージェント化の危険性を論じた。

(6) 冷戦時代におけるアメリカ国家権力とイデオロギーに対抗するクイア演劇の対抗言説に関する政治学的研究の成果として、自ら企画代表者となった日本英文学会第81回大会シンポジウム「テネシー・ウィリアムズのアメリカ」で、「ウィリアムズのアメリカ——暴力、病、ダブル・ヴィジョン」を公表(『日本アメリカ文学会第81回Proceedings』, pp. 206-208)。50年代から70年代にかけてのウィリアムズ作品3

作を中心に、ウィリアムズのダブル・ヴィジョンを支配的権力の暴力に対する戦いと同時に、光と影、表裏一体となった二つの自己との戦いとして捉え、さらに二つの力が衝突し、戦いが展開される場としてウィリアムズの作品世界を論じた。

(7) スーザン＝ロリ・パークスの独創的演劇戦略と問題意識を巡って、ポスト冷戦時代のアメリカ系アメリカ人の歴史表象のあり方と文化的アイデンティティの関係性を、人種・ジェンダーの側面から検討した研究「歴史・キャンノンのトランスフォーマー——劇作家 Suzan-Lori Parks の“Rep & Rev” + “Ref & Riff”」を大阪大学言語社会学会2009年度研究大会シンポジウム「世界文学のフロンティア」(2009年7月30日)で発表。パークスの“Rep & Rev” + “Ref & Riff”を焦点化し、白人のオリジナル・テキストをデフォルメ・パロディー化、模倣・偽装、あるいは黙示録的黒人テキストへの置き換えで、再表象・改訂を加えていくパークスの演劇政治学を検証した。

(8) 合衆国における植民地主義、帝国主義、ポスト植民地主義の歴史表象の変遷と文化的アイデンティティ形成と変容の問題を政治と演劇の関係性から俯瞰し、特にテネシー・ウィリアムズ、ランフォード・ウィルソン、デイヴィッド・レイブ、トニー・クシュナーを中心に、クイアを焦点化した冷戦からポスト冷戦に至る歴史表象と演劇的政治学を研究。その研果を「20世紀アメリカ演劇の政治学——冷戦・クイア・ポスト冷戦」と題して、第51回日本アメリカ文学会関西支部大会(2007年12月8日)で自身の企画・司会によるフォーラム「20世紀アメリカ文学の政治学」で発表した。

2010年、この研究をさらに展開し、過去4年間の演劇的歴史表象と文化的アイデンティティとの関係性に関する研究を踏まえ、演劇的想像力によるアメリカ正史、アメリカ神話の解体／脱神話化と脱構築する現代アメリカ演劇の政治学を可視化・定位するという最終目標として発表したのが、自身の編著書『20世紀アメリカ演劇のポリティクス』(2010)の所収論文「アメリカ演劇、亡霊の政治学——冷戦・クイア・ポスト冷戦」である。この論考において、50年代からポスト冷戦に至るアメリカ演劇のひとつの政治学を、クイア問題を巡る3作『やけたトタン屋根の上の猫』、『ストリーマーズ』、そして『エンジェルズ』に焦点を当て、隠蔽された歴史表象として舞台に浮遊する亡霊の政治学として読み解いた。

結果として、クイアを巡る演劇の流れは、クローゼットの同性愛者から、支配的セクシュアリティ／ジェンダー・パラダイムと支配的歴史表象に挑戦するクイア・アイデンティティへの変容プロセスを映し出す。そして、『エンジェルズ』最終幕4人が形成するクイア・ヘテロ・女性の共同体は、異性愛と同性愛、男性と女性の二項

対立的枠組みを流動化し、人種、宗教、民族の多様性を許容する政治的意識のエージェントとしてのクイアの文化的アイデンティティを可視化する。

しかし『エンジェルズ』が見せる過剰なまでのスペクタクルは、ブロードウェイ・コマーシャルリズムの資本主義ビジネス戦略を巧みに取り込んだゲイ・ファンタジア・ショーの様相を呈し、その正史脱構築ヴィジョンも、巨大な資本主義メカニズムに回収されるパロディに墮する危険性を孕む。リンダ・ハッチオンが語った「批判的共犯性」のように、『エンジェルズ』は支配的イデオロギーと共犯し、その表象システムと方法論を領有することで、そのパラダイムを攪乱・転覆させる共犯的な政治・文化批判パフォーマンスを行うというポストモダン・クイア演劇の政治学が浮かび上がる。そして、批判と共犯という危ういバランスのなかで形成される女性とクイアの多元多人種共同体は、支配的イデオロギーとの共犯関係を保ったまま危うく成り立っているユートピア共同体の様相を呈する。事実、『エンジェルズ』の共同体は、それ以後の湾岸戦争、9.11、イラク戦争、そしてテロとの戦いを旗印にしたアメリカ覇権主義政策の継続を考えれば、舞台上の絵空事に過ぎなかった感はある。それは、演劇による政治的アクティヴィズムの有効性は、興行的成功なくして成立しえない演劇の商業性によって阻害されざるえないものかという問題を提起する。

ここに一つの希望があるとすれば、舞台に可視的・不可視的に浮遊する亡霊の偏在性と浸透力かもしれない。実体のないシニフィアンとなって、演劇興行を巡る資本主義システムとアメリカ覇権主義、家父長制異性愛主義とレイシズムという硬直した社会政治的パラダイムの強固な障壁をすり抜ける。そして舞台のみならず、多様な映像メディア、インターネット、書物という紙媒体に乗って流通し、拡散する。時空を超えて、支配的イデオロギーの暴力と偽善、それによって歪曲された歴史と言説、そのほか社会的・文化的・政治的な歪みを巡る人間の営為を告発し、変化・変革への可能性と志向性を示すエージェントとなって、観客を含む多様な人々の意識あるいは識閥下に浸透し、作用し、歴史表象と文化的アイデンティティの可変的關係性についての再考・更新を促していく。それがクイアを始め、多様な人種的性的マイノリティによるアメリカ演劇に見る「亡霊の政治学」として提示されたものである。

(9) 本研究は、20世紀転換期から21世紀の現在に至る1世紀に及ぶアメリカ演劇の歴史表象と文化的アイデンティティの關係性に関する研究であるが、研究対象となった演劇テキストが照射するアメリカ大陸発見と植民地時代にまでも時空的射程を延ばす。そして、現代の歴史とアイデンティティの多様で流動的な關係性が存在する一方、その多様性を支配しようとする帝

国主義、植民地主義、白人主優越主義、家父長制などの支配言説とのせめぎ合いのダイナミズムが浮上する。また、現代アメリカ演劇における多様な歴史表象は、どのように人種、ジェンダー／セクシュアリティ、クイア、帝国主義、資本主義を互いに交錯・連動させながら、文化的・人種的交雑によって変化し続けるポスト多元文化社会の文化的アイデンティティ・ポリティクスと相互関係を持ち、主体と共同体意識の形成に影響を与えるのか。本研究はそれを明らかにしてきた。上記にまとめた研究成果は、演劇的想像力によるアメリカ正史、アメリカ神話の解体／脱神話化と脱構築する現代アメリカ演劇の政治学を可視化、定位する研究として国内外で、アメリカ演劇の歴史・アイデンティティの關係性に関する先駆的文化研究として大きな意義を持つものなると思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 貴志雅之、「グローヴァーズ・コーナーズの地政学 — 『わが町』に見るサブリミナル・ポリティクス」、『アメリカ演劇』、査読有、21号、2010、3-32.
2. 貴志雅之、「クイア・カップルの亡霊と遺産 — テネシー・ウィリアムズのCat on a Hot Tin Roof」、『立命館国際研究』、査読有、第21巻3号、2009、25-43.
3. 貴志雅之、「クイアのポスト・ヴェトナム — ランフォード・ウィルソンの『七月五日』をめぐって」、『アメリカ演劇』、査読有、第20号、2009、90-111.
4. 貴志雅之、「パラダイムの逆襲 — 『フェブとその友人たち』に見るポリフォニーの幻影」、めぐって、『アメリカ演劇』、査読有、第18号、2008、95-113.

〔学会発表〕(計5件)

1. 貴志雅之、「歴史・キャンソンのトランスフォーマー — 劇作家Suzan-Lori Parksの“Rep & Rev” + “Ref & Riff”」、大阪大学言語社会学会2009年度研究大会シンポジウム：「世界文学のフロンティア」、2009年7月30日、大阪大学箕面キャンパス.
2. 貴志雅之、「ウィリアムズのアメリカ — 暴力、病、ダブル・ヴィジョン」、日本英文学会第81回大会シンポジウム：「テネシー・ウィリアムズのアメリカ」、2009年5月31日、東京大学駒場キャンパス.
3. 貴志雅之、「Grover’s Cornersの地政学 — Our Townが持つサブリミナル・メッセージ」、全国アメリカ演劇研究者会議第25回大会シンポジウム：「Our Townを読み解く — 歴

史と普遍、固体と永遠」、2008年6月29日、エスカル横浜。

4. 貴志雅之、「アメリカ演劇の政治学—冷戦・クイア・ポスト冷戦」、第51回日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム：「20世紀アメリカ文学の政治学」、2007年12月8日、京大会館。
5. 貴志雅之、「Semiotics of Empire Domination: Guns and the Other on the American Stage」、ATHS (Association for Theatre in Higher Education)'s 20th Anniversary Conference: ATDS [The American Theatre and Drama Society]'s Panel “Empire vs. Nation in American Theatre History”、2006年8月4日、Palmer House Hilton Hotel (米国、シカゴ)。

[図書] (計4件)

1. 貴志雅之他、世界思想社、『二〇世紀アメリカ文学のポリティクス』、2010、9-23, 117-150, 249-252。
2. 貴志雅之他、財団法人新国立劇場運営財団、2007、『ブッチーニ 西部の娘』(共著)、16-18。
3. 貴志雅之他、英宝社、『神話のスパイラル — アメリカ文学と銃』、2007、94-144。
4. 貴志雅之他、世界思想社、『二〇世紀アメリカ文学を学ぶ人のために』、2006、184-198。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

貴志 雅之 (KISHI MASAYUKI)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
研究者番号：30195226